

第 2 回豊岡市調査報告書



コウノトリの郷公園コウノトリ本舗前広場にて(2017年8月9日)

日本生命財団・学際的総合研究助成
「環境イノベーションの社会的受容性と持続可能な都市の形成」
都市環境イノベーション研究会
研究代表者・松岡 俊二(早稲田大学)

2017年9月14日

1. 調査目的

日生 PJ 学会企画セッション、書籍・個別論文執筆のための聞き取り調査・資料収集

2. 訪問先

豊岡市役所（本庁舎）

所在地：〒668-8666 兵庫県豊岡市中央町2番4号 Tel：0796-23-1127

豊岡農業改良普及センター

所在地：〒668-8666 兵庫県豊岡市幸町7-11（豊岡総合庁舎4F） Tel：0796-26-3705

コウノトリ本舗

所在地：〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺14-2 Tel：0796-37-8222

JA たじま

所在地：〒668-0854 兵庫県豊岡市八社宮490-3 Tel：0796-23-1127

豊岡市役所（但東振興局）

所在地：〒668-0393 兵庫県豊岡市但東町出合150番地 Tel：0796-21-9032

豊岡市役所（出石振興局）

所在地：〒668-0292 兵庫県豊岡市出石町内町1番 Tel：0796-52-3111

兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科

所在地：〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺字二ヶ谷128番地 Tel：0796-23-5666

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所

所在地：〒668-0025 兵庫県豊岡市幸町10-3 Tel：0796-26-2023

ハチゴロウの戸島湿地（NPO コウノトリ湿地ネット）

所在地：〒669-6103 兵庫県豊岡市城崎町今津1362 Tel：0796-20-8560

豊岡市立加陽水辺公園

所在地：〒668-0841 兵庫県豊岡市加陽582番地 Tel：0796-21-9119

アルチザン・アベニュー（豊岡カバンストリート内）

所在地：〒668-0033 兵庫県豊岡市中央町18-10 Tel：0796-22-1709

3. 調査日程

2017年8月8日（火）

7:53	東京発（のぞみ303号 新大阪行き）
10:14	京都着
10:25	京都発（はしだて3号 天橋立行き）
11:44	福知山着
11:46	福知山発（こうのとり5号 城崎温泉行き）
13:40	豊岡着⇒トヨタレンタカー豊岡駅前店⇒移動

14:40	インタビュー調査①（豊岡市役所環境経済部）
16:00	インタビュー調査②（豊岡農業改良普及センター）
18:00	ホテルチェックイン@豊岡パークホテル
19:00	夕食

2017年8月9日（水）

8:30	ホテルチェックアウト@豊岡パークホテル
9:00	インタビュー調査③（コウノトリ育むお米生産部会@コウノトリ本舗）
11:30	視察①（ハチゴロウの戸島湿地）
12:00	昼食
13:00	インタビュー調査④（JA たじま直販事業部）
15:30	インタビュー調査⑤（豊岡市役所コウノトリ共生部）
17:00	レンタカー返却
17:12	豊岡発（こうのとり 24号 新大阪行き）
18:14	福知山着
18:25	福知山発（はしだて 8号 京都行き）
18:53	京都着
20:05	京都発（のぞみ 254号 東京行き）
22:23	東京着

【事後調査】

2017年8月10日（木）

8:45	ホテルチェックアウト@豊岡パークホテル
9:15	視察②（加陽の朝市、加陽水辺公園）
10:15	インタビュー調査⑥（豊岡市役所但東振興局）
11:00	インタビュー調査⑦（兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科）
11:30	インタビュー調査⑧（豊岡市役所出石振興局）
12:00	移動、昼食
13:00	インタビュー調査⑨（国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所）
14:00	視察③（カバンストリート）
15:30	インタビュー調査⑩（NPO コウノトリ湿地ネット）
17:30	レンタカー返却

4. 調査団

調査団の構成を表 4.1 に示した。

表 4.1 調査団メンバー

	参加者氏名	所属
1	松岡 俊二	早稲田大学・日本生命財団プロジェクト・研究代表 国際学術院・アジア太平洋研究科・教授
2	松本 礼史	日本大学 生物資源科学部・教授
3	黒川 哲志	早稲田大学 社会科学総合学術院・社会科学研究科・教授
4	鈴木 政史	上智大学 地球環境学研究科・教授
5	岩田 優子	早稲田大学 アジア太平洋研究科・博士後期課程（研究会事務局）
6	Yunhee Choi	早稲田大学 アジア太平洋研究科・博士後期課程
7	姚 子文	早稲田大学 アジア太平洋研究科・修士課程

5. 調査の概要

5.1 豊岡市役所

会場：豊岡市役所本庁舎会議室

豊岡市役所環境経済部エコバレー推進課環境経済係 谷垣卓宏係長

豊岡市役所環境経済部大交流課 中田啓之主査

質問項目

- ① コウノトリブランドを活かした地域活性化としての発展性について
- ② 環境経済戦略について
- ③ 豊岡の観光産業とコウノトリツーリズムの協働（の可能性）について

説明概要

- ・環境経済戦略は 2007 年に改訂版を出してから 10 年経った。
- ・環境経済型企業の集積については、認定事業者を取りまとめている。認定事業者は、環境に配慮した事業展開によって環境を良くして、売り上げも伸ばす。
- ・最初は数社だったが、現在は 65 社まで増えている。主にはコウノトリ米による事業、その他、カバンや温暖化対策に関連する事業など。小売業から製造業まで多岐にわたる。
- ・2014 年時点では 45 事業で売り上げ 95 億円（年ベース）だったが、2015 年時点では 55 事業で売り上げ 52 億円と減っている。
- ・市役所としても、認定するだけでなく、少しでも売り上げを伸ばせるようにサポートしている。例えば、中小企業への補助金は、通常 2 分の 1 だが、認定事業者には 3 分の 2 に引き上げている。また、マーケティングなどの専門家をアドバイザーとして派遣している。アドバイザーは、商工会議所と商工会に委託し、市が委託料を支払っている。
- ・パフォーマンス指標としては、認定事業者の売り上げで見ている。平成 31 年（2019 年）で 100 億円ぐらいにはもっていきたいという目安。認定を受けてもビジネスとして成功するかはなかなか難しい。市内の企業を広く浅く掘り起こし、ビジネスチャンスにつなげたい。年間 5～7 業者の認定をしている。
- ・環境経済戦略の 5 つ目の柱である「自然エネルギーの利用促進」については、太陽光＋木質バイオマスの 2 つで進めている。太陽光は、市内 3 ヶ所（日高 2 ヶ所、但馬空港）。メガソーラーは、投資も所有も市（一部リースあり）。関電に売電しており、そのお金で維持管理や環境政策の財源としている。個人の自宅での 4kW 以下のパネル設置についても補助金を出している。木質バイオマスは、ペレット及び薪のストーブとボイラーの設置に補助金を出している。補助金申請は、個人のペレット又は薪ストーブがほとんどで、事業者はあまり出てきていない。
- ・「大交流課」が所掌している事務は、大きく「国内誘客」「海外戦略」「情報戦略」の 3 つの柱がある。
- ・コウノトリツーリズムの展開としては、まだ十分な取組みが行えているとは言えない。

- ・昨年 9 月に地域活性化を目的とした包括協定を KDDI 株式会社と締結した。ビッグデータを活用した国内観光客と訪日外国人観光客の観光動態の分析を行い、豊岡市の持つ観光資源を有効に活用して観光の活性化を図る取組みを行っている。
- ・豊岡には、コウノトリに限らず、いろいろな観光資源がある。現状はこれらの資源をうまく結びつけられていない。市内での滞留時間を延ばすため、域内の周遊を促進していきたい。
- ・観光動態調査レポートから、城崎地域への来訪者は 30 代以下の女性が、また、出石地域への来訪者は 60 代以上の男性が、市全体平均と比べ、高い傾向にある。また、姫路市からの来訪者が多く、流入経路や立寄り先を見ると京都府北部との関係性も見られる。これらデータを活用した施策の創出に地域と協働しながら取り組んでいきたい。
- ・観光まちづくりの観点から、地域の関係者の力を結集し、顧客視点に立ち、地域の魅力を再編集して、地域の稼ぐ力を引き出し、地域経済の活性化に寄与することを目的に、昨年 6 月、一般社団法人豊岡観光イノベーションが設立された。
- ・環境経済戦略の改訂から 10 年経ち、成功したのはコウノトリ育む農法（豊岡型環境創造型農業）だと考えている。コウノトリからのストーリーがうまくいった。それ以外は足踏み状態である。認定事業者の中でも、認定後事業がストップしてしまうこともあるし、そのフォローもうまくできていない。環境ビジネスとしては全国的にいろいろな動きがあり、他の成功事例を研究して支援の参考にしなければならない。
- ・65 の認定事業者の中で、うまくいっているのは有限会社ティーアンドエムズ (No.10)。コウノトリ米を使用したスイーツの製造で、社長が結構積極的。その他、神鍋白炭工房 (No.18)、有限会社和平 (No.39)、有限会社衣川クリーニング (No.52) など。
- ・かばん産地豊岡の取り組みとしては、2006 年に、特許庁において日本で最初に工業製品部門の地域団体商標として、「豊岡鞆」が地域ブランドとして商標登録され、今年で 11 年目。全国百貨店でフェアを行っている。地元でつくったメイドイン豊岡として販売している。かばんの四大産地は東京、大阪、名古屋、豊岡である。かばんは工業統計調査のなめし革・同製品・毛皮に分類され、製造品出荷額等で豊岡は日本一である。
- ・かばんが栄えたのは、材料面＋製造業＋卸商の 3 つが豊岡に備わっていたので、産地として大きくなった。ピークは 1990～91 年のバブル経済末期のころ。現在、売り上げは約 113 億円。製造業者 62 社、卸業者 22 社。関連会社も含めると全体で約 120～30 社あると思われる。組合員については、一般社団法人豊岡鞆協会が把握している。
- ・OEM の産地から脱却しようとしている。
- ・後継者（かばん職人の高齢化）の問題はある。アルチザンスクールや鞆縫製者トレーニングセンターといった育成機関をつくり、産地全体として生き残りをかけている。
- ・観光客にとっては、自治体の境界線は関係ない。点と点を上手に結び、広域連携を図っていきたい。
- ・昨年から、エコバレー推進課と大交流課の合同で、U ターンを推奨している（「飛んでるローカル豊岡」）。市の HP から約 2 分の動画が見られる。6 つの地域でそれぞれ個性があるというプロモーションをしている。都市部から豊岡市への移住をすすめている。

- どの地域も人口減の中で、出ていくのは仕方ない。ただし、出ていった人が帰ってきたくなる街を豊岡はつくっている、という考えでプロモーションしている。
- かばん産業については、I ターンが多いし、歓迎している。アルチザンスクールは現在 4 期生。定員は 10 人、学費は 126 万円（1 年間）。卒業生の半数は豊岡の靴企業に就職している。
- 2015 年から、博報堂とタイアップして移住のプロモーションをしている。お金を出すから移住してくださいというのではなく、豊岡のことを知ってもらいたい。HP に、移住者にブログ形式で記事を書いてもらい、リアルな声を伝えているのが、他の自治体とは異なる取り組みである。
- 2011 年ぐらいに情報発信に特化したセクションをつくって（地域戦略推進室）東京を中心に情報を出した。豊岡エキシビションや、テレビ、新聞、雑誌によって、豊岡の取り組みを取り上げてもらっている。
- 今は、環境経済戦略の 5 つの柱のうち、農業以外の 4 つの柱（豊岡型地産地消、コウノトリツーリズム、環境経済型企業の集積、自然エネルギーの利用）を伸ばしていこうという考え。
- 今年度は足元を固めたい。地元で事業を行っている事業者を育てることが大事。
- レファレンスとして意識している自治体は特にない。全国で最初にやるのが豊岡。地を固めるという点では、対話という言葉をよく使う。市民が、行政が何かやっているなど見ているのではなく、行政が地元に入って行って、一緒に事業をつくる。例えば、現在出石地域で行っている施策創出のためのワークショップなどが具体的な事例と言える。



豊岡市役所正面



豊岡市役所前の市街地図

収集資料

- 環境認定事業一覧（H29/7/19 現在）
- KDDI・コロプラ（2016 年 12 月 28 日）豊岡市観光動態調査レポート資料（市全体・各地域サマリーのみ）（1 部）
- 豊岡靴リーフレット

5.2 豊岡農業改良普及センター

会場：兵庫県豊岡総合庁舎 3F 会議室

兵庫県但馬県民局豊岡農業改良普及センター 亀喜淳一普及主査

質問項目

- ① コウノトリ育むお米生産部会との協働体制について
- ② コウノトリ育むお米のブランド化について
- ③ コウノトリ育む農法開発過程の経緯について（コウノトリプロジェクトチームの結成など）

説明概要

- ・祥雲寺区では、集落営農をどうしていくかという中で営農組合の準備組織をつくった。西村いつき氏は、2002 年から関わってきた。もともと、稲葉氏が農薬に頼らない米づくりという考えを持っていた。
- ・2004 年は、祥雲寺区で作られた米を「コウノトリの郷米」として販売した。2005 年にコウノトリ育む農法と命名された。生産部会は 2006 年に結成された（JA が事務局）。コウノトリ米のスタートという意味では 2005 年と考えて良い。何をもってコウノトリ米のスタートと言うかは、様々な要素（例えば 2003 年に試験栽培が始まった、2004 年に栽培暦が統一された等）があるかと思う。「コウノトリ育むお米」という名の商品は 2005 年から販売がスタートしており、「コウノトリ育む農法」の命名、要件・定義の決定等は 2005 年なので、本格的にスタートしたというのは 2005 年と言っても良いかと思う。
- ・「コウノトリ育む農法」という農法が認知され、その定義、要件で栽培されたお米が継続的に販売、購買されるようになることをもってコウノトリ米がブランド確立されたと考えられる。
- ・「三位一体（市・県・JA）の普及体制」図内にある「県の農家への財政支援」とは、但馬県民局独自の補助事業である「コウノトリ育む農法拡大総合対策事業」が挙げられる。同事業には PR 活動への支援や技術実証ほ設置なども含まれるが、その中の「コウノトリ育む農法拡大条件整備事業」には、農法の取組面積を拡大しようとする団体に対して資材費、労働費等を補助する「栽培経費補助」と、共同利用機械等の整備に要する経費を補助する「共同利用機械等整備補助」等がある。一例では、「栽培経費補助」において水稲（無農薬タイプ）を拡大しようとする場合（3 年以内に概ね 2ha 拡大）、申請年の拡大計画面積に対し 35,000 円/10a（上限 2ha 分）を補助する。また、「共同利用機械等整備補助」において水稲または大豆の無農薬タイプを推進する団体への共同利用機械等の整備では、経費の 2 分の 1（補助金上限 2,000 千円、面積要件 3 年以内に概ね 2ha 以上拡大）を補助する（その他の条件、補助内容については別紙参照）。事業実施主体は農地所有適格法人、農業参入法人、その他団体（3 戸以上）等であり、新たにコウノトリ農法に取り

組む場合でも、既に取り組んでいる場合でも対象となる。2017年度の事業予算は約850万円。

- ・豊岡市の財政支援としては、コウノトリ育む農法推進事業。2010～2012年までコウノトリ農法の栽培面積の拡大が鈍化したので、2013（平成25）年から、みのる産業と提携して、無農薬栽培の推進を図った。無農薬栽培実証事業は昨年まで3年（市内5軒の農家に委託）、無農薬栽培チャレンジ事業は一昨年から今年まで3年（市内17軒の農家に委託）行っている。市がお金を出して県もサポートをしている。栽培のしやすさを考えると良いと思う。無農薬栽培を更に上手く行う技術として、農業者が「ポット成苗」に興味を持ち、応募しチャレンジしている、という感じ。技術力があまりなくても、地域全体に無農薬栽培を広げることを目的としている。苗が良いので単収も良い。
- ・みのる産業は岡山の会社である。豊岡だけではなく、全国展開している。シイタケ事業部は、2007年に但東町で但東工場として開場している。
- ・生産部会を中心とした三位一体の普及体制の利点を考えると、各地域で生産部会はあるが、市が県民局と連携して、全般的に関わっている地域はあまりない。市の農林水産課と連携している。
- ・コウノトリ育む農法アドバイザーについては、もともと普及センターが農家に技術指導していたが、普及員だけでは対応できないだろう、生産者の中で技術を確立しておく必要があるだろう、という考えから、指導的な立場の生産者を育成する目的で、但馬県民局においてコウノトリ育む農法アドバイザー養成講座を開講した。栽培技術の他、生きもの調査の手法、話し方などについても講座が設けられた。その後、アドバイザーによるコウノトリ育む農法アドバイザー研究会（事務局：豊岡農業改良普及センター）が設立され、研修会等が開催されている。
- ・冬期湛水の際などの水利権の問題については、必要に応じて集落座談会等で検討してきた。（水を汲み上げる）ポンプ代（電気代）の負担などの課題もある。
- ・コウノトリ農法の技術については、全く新しく開発された物ではなく、様々な専門家からの助言や他地域の事例等を参考に組み立てた。
- ・農業の専門家から見ると、豊岡は水管理がやりやすい。コウノトリという物語があったから、経済活動がやりやすかった。他の地域ではできなかったと思う。
- ・コウノトリ米は、地元関西だけではマーケットとして限られているので、よりマーケットとして大きい東京での販売に力を入れていっている。



インタビュー風景①



インタビュー風景②

収集資料

- ・兵庫県但馬県民局豊岡農業改良普及センター（2017）コウノトリ育む農法について
- ・豊岡市「コウノトリ育む農法の推進、コウノトリと共生する水田自然再生事業、『コウノトリの舞』ブランド化事業」に関する説明資料（9pp.）
- ・コウノトリ育む農法の取り組み経過
- ・コウノトリ育む農法アドバイザー研究会について
- ・豊岡農業改良普及センター、新温泉農業改良普及センター、朝来農業改良普及センター（2015）「おいしく安全な農産物と生きものを同時に育むコウノトリ育む農法」パンフレット

5.3 コウノトリ育むお米生産部会

会場：コウノトリ本舗

コウノトリ育むお米生産部会 大原博幸部会長

質問項目

- ① 生産部会設立の経緯について（準備委員会発足から生産・販売・流通体制の整備までの流れ）
- ② 生産部会の現状、特に県・市・JAとの三位一体の普及体制や関連協議会との関係性について
- ③ 生産部会の今後の展望について（ブランド化の成功をどうみているかなど）
- ④ コウノトリ育む農法開発過程の経緯について（西村いつき氏の活動を中心に）

説明概要

- ・生産部会設立の経緯としては、2005年に農法の技術体系が確立されて、環境と経済の融合を考えたときに、環境を優先すると経済がなおざりになるので、JAには販売戦略があるので、JAの生産部会として販売していこうと考えた。
- ・コウノトリ農法で特許をとろうかと検討したが、新しい技術ではなく、米糠など昔からある技術の組み合わせなので難しい。
- ・特許がとれないなら、商標をとろうと考えた。NHKスペシャルで全国放送で流してしまうと商標登録ができなくなるので、その前に商標取得を考え、その際に、（県知事では時間がかかるので）市長の名義で商標をとって、米をブランド化していこうとJAから使用許可をもらった。中貝市長の功績は大きい。
- ・当初は豊岡市だけの課題としていたが、豊岡市以外にもコウノトリは飛んでいくので、但馬全域での組織化が必要と考え、生産部会の本部・支部体制を整備した。現在、生産部会の所在地は養父市からJA本店（豊岡市）に移り、部会員は320人ぐらい。
- ・コウノトリ農法の基本は、安心安全なお米なので、部会の方針としては、無農薬栽培を増やしていきたい。さらに、これからの米の販売においては、安心安全というのは消費者にとって常識なので、食味が大事になってくる。そのため、全国食味鑑定コンクールにできるだけ応募して上位入賞を狙っていこうとしている。
- ・加えて、これまでの販売は国内に焦点を当ててきたが、これからは海外を目指した展開を図る。2015年にはミラノ国際博覧会の日本館の料理に使用され、昨年は、ニューヨーク、ドバイ、シンガポールに進出した。
- ・グローバル・ギャップ（GAP: 農業生産工程管理）については、部会員から4名に取り組んでもらっている。こうしたもので評価をしてもらわないと、ブランド評価にはつながっていかない。
- ・2004年に「コウノトリの郷米」で販売した当時は、ブランドにしていくという強い気持ちはなかった。コウノトリ育む農法やコウノトリ育むお米の方が、地域の思いとマッチしているのではと考えた。郷米は、コウノトリ育むお米になってからは売り出されてい

ない。JA はそのまま郷米でいきたかったと思う。

- 2003 年に市や JA の認証制度ができて、コウノトリ農法とこれを連動させていこうというので取り込んでいった。
- 市長が認証して、県と市の交渉で、市外の人でも市長に申請すればコウノトリ育む米として売れるようにした。
- JA を通さず、個人で多方面に売り出した農家も 2、3 軒あった。コウノトリ育む米として商標登録はしていないが、コウノトリ農法で作った米というので個人的に売り出している人もいる。
- 生産者と行政、JA の三位一体体制は豊岡の強みである。佐渡のトキ米は上意下達だが、豊岡では国は関与しておらず、地域からの盛り上がりでつくっている。
- 2005 年に発足したのは、生産部会の準備委員会という言い方より、普及センター・市・JA による連絡会議（三者会議）によって準備が進められた。JA が事務局となって、普及センターが主導する形で、市（農林水産課）と一緒に技術支援を行っていた。普及事業が開始されてから 2、3 ヶ月に 1 回もともと開催されてきた。
- 連絡会議の中で、西村いつき氏の主導で実務者会議が派生して、担当者レベルで具体的に生産部会設立に向けて動いてきた。エコファーマーズの成田市雄氏や郷営農組合の稲葉氏、啜氏などが、西村氏を中心にコミュニティをつくっていた。
- 2004 年ごろは、JA は生産部会設立について乗り気ではなかった。ただ、JA の販売担当の堀田氏に関心を持ってくれて、合意形成にもっていった。JA を動かすのに苦労した、と当時西村氏も語っていた。
- 2004 年に、プレミアムをつけてトヨダで売り出した。
- コウノトリ農法の原点は無農薬で、無農薬からスタートしている。ただ、無農薬は大変なので、減農薬も認めている。
- 三位一体の体制は、濃淡の違いはあるが他地域でもある。
- コウノトリ育むお米推進協議会は、会長が JA たじま、市が事務局。お米推進協議会は他地域でもあるが、市が事務局というのは、豊岡以外ではあまり見られない。
- コウノトリ共生農業推進協議会も市が事務局。流通・販売の拡大や、消費者との交流を行っている。
- 販売面での取り組みは、この 2 つの協議会中心で行っている。
- 生産部会の本部については、豊岡市中心でコウノトリ農法に取り組んでいるため、昨年養父市から豊岡市に変わった。
- コウノトリ農法の本質は、さまざまな技術の組み合わせ（パッケージ）によって田んぼの生きものを増やすということ。行政や JA ではなく、生産者自らの規範としてつくった、下からの発意をいうのがポイント。
- 佐渡のトキ米も同じように環境保全型農業の先進地。
- 江（魚の逃げ道）は豊岡でも少しやっている。魚道は田んぼと水路をつなぐもの。
- 生産者は、「(コウノトリを) 育む」というのがこのお米の意義だと思った。郷米にはこだわりはなかった。「育む」は、多様な関係者の連携の強さも表している。

- ・個人でコウノトリ米を売るのは難しい。
- ・兵庫県では環境創造型農業という言い方をしている。環境保全（昔に戻る）ではなく、新しい農業を創造していこうという考え。
- ・特に機械化してくると、圃場整備している水田の方がコウノトリ農法を効率的にやりやすい。
- ・ふゆみず田んぼは必須条件ではなく、できる人がやってください、というスタンスだった。2014年から冬期湛水⇒冬水田んぼにして、同時に必須条件にした。ちょうど2015年に直接支払制度が法制化されたので、補助金により、冬水田んぼをする人が増えた。
- ・冬期湛水をするとう畦畔が弱くなるので、冬期湛水と早期湛水の間は1ヵ月空ける。
- ・コウノトリ農法だけやっている専業農家はない。コウノトリ農法に取り組む農業者は全体としては減っているが、部会では若い人も関心を持ってきていると考えている。
- ・後継者としては、農業者の子弟が中心で、外部からの後継者の参入はあまりない。
- ・米については、消費者のいろいろなニーズに応えるのが大事。いろいろな種類の米を作って、収穫時期や作業時期を分散する。
- ・(市内の) 水稻を作付けしている農業者が有している水田が一番大きいもので60町歩。農業法人で、従業員を6人抱えている。そのうち、コウノトリ農法は2~3割行っている。5ha以上コウノトリ農法をやっている人は結構いる。自分(大原氏)は1.8haやっている。
- ・個人でなくても、営農組合としてコウノトリ農法をやっていこうという動きはある。
- ・祥雲寺区の23戸というのは集落としては小さい。普通は30~40戸ある。
- ・このあたりは冬期に雨雪が多いので、畑作ができない。麦もやっているが生産性は低い。コウノトリ育む大豆は補助金が出るので採算がとれる。
- ・水田雑草と畑作雑草が違うので、田畑輪作することで連作障害対策にもなる(昔からの技術)。
- ・一般的な環境保全型農業は減農薬・無農薬栽培。コウノトリ農法は、生き物を増やすために水管理に特長があり、全体的な動機が大きく異なる。
- ・コウノトリがいなくてももうひとつの特別天然記念物であるオオサンショウウオだけだったら、シンボルにはならなかった。その意味で、コウノトリが飛んで行っている福井県越前市や千葉県野田市で積極的に保全型農業をやっていこうという動機はない。これらの市から、農業に関して豊岡市へのアプローチもない。越前市は視察に来たが、積極的な技術交流はない。
- ・無農薬技術が確立されると、雑草は少なくなるが、ゼロにはならない。減農薬栽培は農薬というより、除草剤を使う。
- ・グローバルな展開として、当面は東京五輪でのグローバルギャップを狙う。
- ・海外戦略にあたっては、生産性を上げていく必要があるので、部会としてGAPに挑戦していく。GAPに取り組むだけの技術力を持った人が少ないので、選抜するしかなかった。
- ・コウノトリ農法の要件の認証取得については、行政のお墨付き、というレベル。本当は有機JASのみを要件としたいが、ハードルが高すぎて普及できない。ひょうご安心ブランドでは比較的ハードルが低い。JAの部会が認証の申請事務をやっているので、生産者

が認定を受けるのに大きな障害ではない。

- ・生産部会は、年に4回開催している。



インタビュー風景



コウノトリ本舗そばの野外コウノトリ

5.4 JA たじま

会場：JA たじま会議室

JA たじま営農生産部米穀課 塩見真仁係長

JA たじま営農生産部営農課 長瀬智嗣課員

質問項目

- ① コウノトリ育むお米生産部会との協働体制について
- ② コウノトリの郷米とコウノトリ育むお米について
- ③ コウノトリ育むお米の今後の展望について（ブランド化の成功をどうみているかなど）
- ④ 東京五輪に向けた「農業生産工程管理（GAP）」取得への動きについて
- ⑤ 生産部会の会議資料について

説明概要

- ・栽培ごよみは、技術協議を踏まえて、毎年改善している。稲の刈り入れ時期や鶏ふんの量など肥培管理や栽培管理を見直している。また、「冬みずたんぼ」を必須事項とし、雪や雨など天水を利用し、冬鳥のエサ、イトミミズの繁殖を促している。冬水たんぼに変更したのは、平成 26（2014）年産米から。努力事項から必須事項に変更するにあたり、雪を利用するというニュアンスにすることで、農業者の心理的なハードルを下げた。冬期湛水は、国の要件により、湛水状態の基準があるが、豊岡地域では、取り組み易いよう冬水たんぼとした。豊岡地域では、雪、雨が冬期間多い為、水尻を締め、天水により湛水にすることで取り組み易くなっている。さらに、2015 年 4 月に国の直接支払制度が法制化されて補助金が支給されるようになったことは、冬期湛水に取り組む農業者の数を増やした（国の基準を満たせず補助金を受け取れない可能性もある）。また、コウノトリ育むお米以外でも冬期湛水に取り組む生産者は増加している。
- ・生産部会は生産者がつくった団体なので、その人たちにとっていかに役に立てるかを考える。
- ・営農生産部米穀課は、2 年前まで堀田氏が担当していた。
- ・コウノトリ育む農法アドバイザー制度は、篤農農家から若手への支援を行っている。
- ・コウノトリ農法は地域の取り組みなので、JA も協働しなければいけない。商標については市の役割である。市は、資金面でのサポートが大きい。JA としては、販売面で市が出てくるのは歓迎。コウノトリ農法をいかに広げていくかが大事。市は、巡回研修会にも来る。市がリードすることで、市長がどのように考えているかもわかる。
- ・JA としては、コウノトリ農法が広がることへサポートをしていく。JA を通して出荷しているコウノトリ米は、9 割ぐらいと考える。自家消費、縁故米含めて。他の米はできていなくてコウノトリ米ができているのは、生産部会の役割が大きい。JA 以外では、取り組みの過程もあり出荷は難しい。ブランド化を進めるためにも JA を通す意義はある。

- ・主食用の米約 8.5 千トンのうち、コウノトリ米は約 1,400 トン (1,500 トン=5 万袋)。
- ・生協、スーパーごとで販売額は異なる。量販店で大量に売ってもらっても、優遇はしない。量を売るのが目的ではないので。
- ・販売先として、関西圏の量販店や生協は概ね提案した。関東圏で拡大していきたい。一社あたりの取扱量が一番大きいのは、沖縄のサンエー。
- ・コウノトリ米が誕生して今年で 12 年だが、終わりが無い。今後の販売戦略としては、モノよりもコトを考えている。例えば、株主優待の粗品、お中元・お歳暮の贈答品、赤ちゃん体重米、病院での販売 (コウノトリ米の無農薬タイプはアレルギーのある人の体にも優しい)、などを進めている。城崎アートセンターに滞在する世界のアーティストにコウノトリ米を食べてもらい、口コミで広げてもらいたい。
- ・JA は、今のところ、ツーリズムにはあまり関わっていない。後から大きな動きにしていきたいが、JA としてはまずはコウノトリ米というコアを極めていく。
- ・他のブランド米については、トキ米を良い意味で少し意識しているぐらい。自分たちの取り組みを信じてやっている。
- ・コウノトリ米が始まったときは、JA も手探りで進めていた。今後は世界からいろいろな支援をしてもらえればと考えている。
- ・コウノトリ米の地域内消費については、学校給食がほとんどである。
- ・コウノトリ米の品種として、コシヒカリ以外では、五百万石とこなだもんがある。前者は酒米になり後者は米粉になる。
- ・グローバルギャップについては、コウノトリ農法に従事しているベテラン 2 人と若手 2 人で先行的に認証取得に取り組んでいる。将来的には、認証対象者を増やしていくことも考えている。
- ・昨年、グローバルギャップに取り組む若手農業者のひとり (青山直也氏) が、米・食味鑑定コンクール国際大会で、約 5,700 品の、金賞 15 品の中でも、最高得票数を獲得し、実質の”日本一”に輝いた。兵庫県のコシヒカリのランクは、特 A である。続けて食べてもらうためには、食味が大事。
- ・コウノトリ農法に取り組むのは、経営目線が高い若い農業者が増えている (青山氏など)。
- ・現時点で、ブランド化としては、各方面で紹介して頂いている。どこまでブランド確立となったかは分からないが、更なる消費者の方への認知が必要と考える。



インタビュー風景



JA たじま直売所で売られている米

収集資料

- ・JA たじま 「『コウノトリ育むお米』 ご紹介」

5.5 豊岡市役所

会場：豊岡市役所本庁舎 2 階打合せスペース

豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課環境農業推進係 山本大紀係長

質問項目

- ① コウノトリ育むお米生産部会との協働体制について
- ② コウノトリの郷米とコウノトリ育むお米について
- ③ コウノトリ育むお米の今後の展望について（ブランド化の成功をどうみているかなど）

説明概要

- ・今年 4 月に異動してきた。
- ・コウノトリ米は経済的な側面に注目が集まるが、最も大事なコンセプトは、野生復帰のために生き物を増やす、生き物がすめる場所をつくるということ。ただ、持続可能性のために経済的な裏打ちがある。
- ・『コウノトリと共に生きる—豊岡の挑戦—』（改訂版）の年表で、一番下がサイエンスの意味でのコウノトリ。1997 年から環境に配慮した農法がスタートしている。「次世代育成」の項目は、持続性の担保の意味で重要である。サイエンスのコウノトリに、多様な要素が段々乗っかってきた。「運動拡大」の上は、「世界へ」。豊岡市の方向性は「ローカル&グローバル」であり、コウノトリ育む農法はローカルの最たるものである。いろいろな要素が乗っかる動きは今後も広がっていく。この年表に足りないものは何かを市全体として考えていく必要がある。
- ・「環境と経済」については、一見相反するものが共鳴し合っている。経済的な裏打ちがないと環境配慮の農業も持続しないので、販売先である出口を確保することが大事。コウノトリ育む農法は、最初は農家からの内発型で、それを市がサポートしてきた。
- ・三位一体体制による協働については、県の普及センターは米の品質の安定、JA はコウノトリ育むお米として販売するところで協力し合っている。
- ・平成 28 年度で、コウノトリ育む農法の栽培面積は 366ha。生産部会の会員は個人と団体合わせて 332。うち、豊岡北部支部は 75、豊岡南部支部は 163。
- ・豊岡市全体の稲作面積は、2,700~2,800ha ぐらいなので、コウノトリ育む農法の栽培面積は約 13%。この農法が増えるにしたがって、販路（出口）をきちんと確保できるかという課題が出てくる。海外への販売も視野に入れて集荷量の多い JA と組んでいる。
- ・市全体として、環境創造型農業を進めている。コウノトリ育むお米のほか、つちかおり米やふるさと但馬米、あいがも栽培米などの「豊岡型環境創造型農業」の比率は現在 36.8%。平成 33 年度で 51%（約 1,400ha）を目標としている。51%という数値目標は、半分を超えようという発想である。これは豊岡の農業振興戦略に記載されている。近年の伸び率をみると、増える要素があるのはコウノトリ育むお米。
- ・しかし、実際にコウノトリ育むお米を倍の面積で栽培したとしても売れるのか。1ha で約 4~5 トン収穫できるのが、700ha になるとどうなるか。農家所得の低減になってはダメ。

- ・このこともあって、販売先が海外に向かっている。販売量を増やすことと、「価値の逆輸入」により日本での売り上げ増を期待している（付加価値を高める）。
- ・来週、豊岡市と JA たじまが協同して香港での販売プロモーションを行う。香港はアジア経済の中心地でもあり、今後の展開に期待している。海外での定番販売は香港が初めて。
- ・販売、特に海外販売については、JA・市・流通事業者で進めており、県は直接関わらない。県は主に生産面に関わっている。
- ・戸島湿地で、休耕田を湿地化するにあたり、地域内であまり問題があったようには聞いていない。
- ・ビオトープは復田が可能なので、効率的な制度だと考えている。水田再生事業はまだ継続して実施している。委託料はコウノトリ共生課が支払う。耕作放棄地は約 500ha ある。
- ・コウノトリ野生復帰事業の次の目標を模索している状況といってもよい。過渡期と考えている。「何羽のコウノトリ」という数値目標はない。コウノトリが野外で完全に自活するための絶対的な餌量はまだまだ足りていないと考えている。餌場の確保が必要である。
- ・今年は、他地域でもコウノトリが繁殖に成功した。全国へ飛来するコウノトリに対し、豊岡として何をすべきか、考えなければならない。
- ・今年度から、「小さな世界都市豊岡」を実現するためのローカル&グローバルを進めるため、ふるさと学習をスタートした。
- ・コウノトリ農法の栽培歴は 1 ヶ月ほど遅いので、他の品種との組み合わせによる経営も考えてもよいと思う。
- ・人口減については、減り続けるのを止めることはできないが、せめて緩やかにできないか、地方創生で必死にやっている。
- ・コウノトリツーリズムは、JTB などでもやっているが、なかなか一般受けするものとして確立・持続させるのは難しいと考えている。
- ・さまざまな事業を持続可能にするためには、外部の力も必要と考えている。旅行で豊岡を訪れる、お米を食べて応援する、ほかに CSR の場として利用されてもよい。これらのマネジメントをする職員が必要。
- ・コウノトリ育むお米のブランド化にはある程度成功しているが、まだ途上である。世界各地で広がってしかもプレミアムで売れないといけない。あきたこまちやゆめぴりかや青天の霹靂は、日本で認知されている。地域ブランドの確立ということを考えると、販売を安定させることがまず重要である。
- ・JA が取り組まれているグローバルギャップの取得について、取得の意義が明確になっていない。もともと農地の持続可能性のために始まった制度と聞いており、一旦経済とは切り離して考える必要があるのかも知れない。

収集資料

- ・豊岡市（2017）『コウノトリと共に生きる―豊岡の挑戦―』（改訂版）

- ・豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課「コウノトリ育むお米」パンフレット
- ・豊岡市役所コウノトリ共生部農林水産課「コウノトリ育む農法」パンフレット

5.6 豊岡市役所(但東振興局)

会場：豊岡市役所但東振興局会議室

豊岡市役所但東振興局地域振興課地域振興係 由利健司主査

説明概要

- ・平成 18 年から神戸市の中学校の野外活動として、但東町の農家民泊に来てもらっている。
- ・平成 27 年から、交流人口の増加を通じて地域活性化を図るために、受入体制の整備、受入家庭の旅館業法許可取得等について役所もバックアップを始めた。
- ・民泊軒数は横ばい。もともとボランティアなので、お金というよりやり甲斐で、子供も独立した 60～70 代が中心。
- ・許可を取っている（屋号を取得している）のは 11 軒。専業農家は 2、3 軒。他は、兼業農家、年金受給者か自営業者。市町合併前からあったのは、八平と善の 2 軒（これらの農家は中学校以外の一般客も受け入れている）。
- ・事務局としては、1 回の受入れを 200 人ぐらいに増やしたい。年間 10 校ぐらいに来てほしい。
- ・修学旅行の誘致を目指している。理想は私立の修学旅行を誘致したい。
- ・平成 27・28 年度に、農水省の補助金で JTB と組んでメニュー開発した。JTB は福知山支店との契約で、平成 29 年度も連携している。DMO の田島参事（JTB から豊岡市に出向、現在は豊岡市から DMO に出向）とは、市役所職員として連携している。豊岡市ののちの教育推進協議会（但東町の民泊農家や但東シルクロード観光協会等で構成され、但東町の教育旅行の振興に努める。事務局：但東シルクロード観光協会）と DMO は現段階では具体的な連携はないが、将来的には DMO との連携は進めたいと考えている。
- ・農家民泊はいずれはインバウンドも考えているが今のところ学校が主対象である。
- ・学校サイドとしては、但東町で民泊体験教育（農業体験＋家庭とのふれあい）を行いたいという思いが強い。昨年は、但東町に来た学校のうち 1 校はコウノトリの郷公園には行かなかった（郷公園までのバス代の問題もあるかもしれない）。家庭とのふれあいを大事にするため、なるべく少人数で生徒を分けてほしいという要望がある（受け入れ農家数の関係で難しい）。受入回数・受入人数が多いと、機械的な対応になってしまうという危惧はある。
- ・コウノトリ（野生復帰）については、「いのちの教育」として体験教育旅行の主要メニューとして位置づけている。
- ・農家でコウノトリ農法の説明はする。「ホテルシルク温泉やまびこ」では、コウノトリ米を使っている。ただ、食味の方が大事（但東町は水が源流の関係でおいしい）。
- ・但東町の住民も、コウノトリが自分の町の鳥というように考え始めている。ただし、コウノトリにばかりお金を使うなんて、という意見はある。
- ・但東町は、合併後に 5 千人から 4 千人に人口が減った。人口減少率は、合併した 1 市 5 町で一番高い。人口減少プロジェクトとして、昨年からは但東振興局において婚活プロジェクトを行っている。

- ・但東町の集落も「コウノトリ舞い降りる田んぼ事業」の認定を受けたことで、自分の町の鳥という意識になってきた。
- ・冬期湛水にあたっては、但東ではポンプアップする必要がないため、ポンプアップする地域に比べると水の確保が比較的容易である。
- ・国の補助金（直接支払い制度）によって冬期湛水をする人が増えた。補助金は、当然、ふるさと但馬米もつちかおり米も対象である。環境創造型農業を始めるひとつのきっかけにはなると思う。



シルク温泉やまびこのペレットボイラー



但東観光案内

収集資料

- ・豊岡市いのちの教育推進協議会「農家民泊開業しませんか？」パンフレット
- ・豊岡市体験教育旅行受入実績（平成18年～）
- ・教育民泊推進事業概要
- ・豊岡市役所但東振興局「田舎に泊めよう生徒さん受入よろず説明会」チラシ
- ・豊岡市役所但東振興局「田舎に泊めよう博覧会」チラシ
- ・豊岡市いのちの教育推進協議会「但東民泊新聞1号」（2016年1月1日）
- ・豊岡市いのちの教育推進協議会「但東民泊新聞2号」（2016年6月1日）
- ・豊岡市いのちの教育推進協議会「但東民泊新聞3号」（2017年1月1日）
- ・豊岡市いのちの教育推進協議会「兵庫県豊岡市但東町『いのちの輝き体験教育旅行』」
- ・但東シルクロード観光協会「田んぼアート！イラストマップ」

5.7 豊岡市役所(出石振興局)

会場：豊岡市役所出石振興局打合せスペース

豊岡市役所出石振興局地域振興課地域振興係 大岸勝也係長

説明概要

- ・市町合併前後の変化としては、合併後は城崎との差別化の意識が強くなった。出石町では、農業よりも出石焼や出石そばを中心とした観光業に予算をつぎ込んできた。市全体として城崎を中心に、新豊岡市の観光業は廻っている。旧豊岡市は観光業はそれほど盛んではない。
- ・出石地域にとってコウノトリはあくまで副産物であり、これに乗っかってツーリズム展開しようという意識は低いと感じている。
- ・無農薬・減農薬の農業をする人は徐々にではあるが増えている。つちかおり米ではなく、コウノトリ農法をやる人が増えている。農林水産省の冬期湛水の補助金の影響だとおもわれる。ただ、コウノトリ農法は市役所本庁の農林水産課が主導しており、各振興局は本庁の補助的な役割しか担っていない。農業者から相談を受けたら、メリット・デメリットについては説明している。
- ・新豊岡市全体のブランド化については、地域によって培ってきたものが異なっているものの、「コウノトリもすすめる町づくり」という共通目的のもとに取り組んでいるところである。
- ・出石観光センターでも、コウノトリ米は販売している。市のブランド農産物の野菜なども含めて販売、PR はしている。
- ・観光業については、城崎とのパイプが一番強い。出石地域には、車での来訪者が一番多いが、最近バイクで京阪神から来る人が増えている。バスでの団体観光客は減っている。
- ・KDDI の観光動態調査レポートによって、目に見える数字ではっきり表れたので、今後の取り組みの参考になった。
- ・今後の地域活性化政策としては、これまでと同様に城崎と連携した観光業がメインとなる。市外でも京丹後市や養父市、竹田城を有する朝来市ともタイアップしていきたい。行政主導ではなく、あくまで地域住民主導の事業に対して投資していきたい。
- ・市町合併は、地域の住民の声が聞こえづらくなったり、平準化によるデメリットはあるものの、地域間の連携という意味では良かった。



出石振興局内観



出石皿そば

収集資料

- ・「ひとと暮らしがやさしくとけあう伝統と創造の町・いずし」（平成24年4月改訂）

5.8 兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科

会場：兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科事務所応接室

兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科 佐川志朗教授

説明概要

- ・ コウノトリのペアはなわばりを形成して生息しているので、豊岡地区では生息数が上限に達している可能性がある。今後は豊岡外での営巣が増加していくものと思われる。
- ・ 農薬としてターゲットを明確にした除草剤が適量使用されるにすぎない慣行農法とでは、そこに生息する生物の量には顕著な相違は存在しないが、それぞれの農法で生息している種類が違う傾向がある。
- ・ 水管理の仕方が異なれば、生息する生物の種類と個体数も異なり、多様な農法・水管理の水田を存在させることが、生物多様性の確保およびコウノトリのえさの供給という点でメリットがあると考えられる。
- ・ 慣行農法ではハウネンエビなど乾期を必要とする生物が多く、育む農法ではアカネ属（トンボ）が多い。冬期湛水によってカエルが減ったとの証言もあるが因果関係は不明。
- ・ 冬期湛水は強還元土壌であるトロトロ層を堆積させ、抑草効果を高めるために行われており、また育む農法の実施当初から要件となっているため、生産者の中には消費者との約束として重視している方もいる。

収集資料

- ・ 野生復帰 4 巻 1 号（2016 年・兵庫県立コウノトリの郷公園発行）

5.9 国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所

会場：国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所会議室

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所 寒川雄作副所長

国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所調査課 濱田皓司調査係

説明概要

- ・湿地の創設、整備のために行われた円山川の多自然化の具体的な施策について説明を受けた。
- ・加陽湿地の創設の経緯について説明を受けた。2004年の台風23号による被災で耕作がきらめられていた休耕田の堤外農地を買収し、自然再生事業の一環として整備したのが加陽湿地である。現在も、地元の人々と一緒に湿地の維持管理をしている。農地の買収と湿地化に対しても協力的であった。

収集資料

- ・国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所（2013）円山川水系河川整備計画の概要—国管理区間—
- ・平成29年度事業概要（平成29年4月・国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所）
- ・国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所（2011）「円山川の自然環境・みんなが輝く地域の宝もの」

5.10 ハチゴロウの戸島湿地(NPO コウノトリ湿地ネット)

会場：ハチゴロウの戸島湿地事務所

NPO コウノトリ湿地ネット 佐竹節夫代表

説明概要

- ・放鳥されたコウノトリの移動について説明を受けた。
- ・戸島湿地が湿地化されるに至った経緯について説明を受けた。周辺水田の圃場整備が順次実施中で、順番を待っているときに台風が襲来した。被災し湿地状になっていたとき、大陸から野生コウノトリ（ハチゴロウ）が飛来し、魅力的な姿を見せたことから、ここを湿地に整備する動きがうまれた。もともと水害にあいやすい低湿な地形である。地元農家は、農地の買収に対して（特に高齢者に）抵抗があったが、中堅の世代は賛成した。
- ・田結地区の湿地化の経緯について説明を受けた。農地は棚田なので、圃場整備は投資効果はないと実施されなかった。元々、半農半漁の地域で、若手が次々と市街地に勤めるようになるにつれ、農業意欲は減少の一途をたどった。女性も、城崎温泉で働いて現金収入が増えたことで、放棄田が増えた。2008年にコウノトリが突然に飛来した。飛来は、自分の代で田んぼを止めてご先祖様に申し訳ないという罪悪感を償う気持ちもあり、コウノトリのために湿地化、そして管理に取り組むようになった。湿地はすべて個人所有のままだが、協会は無視して湿地づくりを行っている。
- ・無農薬をやりだすと生物（益虫）を利用することが重要で、生物に関心を持つようになった。
- ・農業は経済的に成り立つことが前提。補助金に頼る現在のやり方ではなく、コウノトリ育む農法によって、収入増と環境創造を目指すことが大切。



ハチゴロウの戸島湿地



戸島湿地のコウノトリ

収集資料

- ・「ハチゴロウの戸島湿地」リーフレット（2015年3月）
- ・「コウノトリ湿地ネット 入会のご案内」パンフレット
- ・コウノトリ湿地ネット（2014）『豊岡市田結地区の挑戦ーコウノトリと共生して暮らす村』

づくり』

- 豊岡市（2007）『(仮称) ハチゴロウの戸島湿地整備基本構想計画』抜粋
- ”Ramsar-Danone-Evian Programme “Ecole de protection de l’eau” 2013-2015”リーフレット

5.11 豊岡市立加陽水辺公園(施設視察)

加陽水辺公園（2017年5月20日竣工）内の交流館にて、加陽湿地整備の経緯やコウノトリ農法に関するパネル展示を見学後、出石川に沿って車を走らせ、車中より湿地を視察した。



加陽水辺公園交流館



加陽湿地

収集資料

- ・国土交通省近畿地方整備局豊岡河川交通事務所「出石川加陽地区 大規模湿地再生事業」
- ・「豊岡市立加陽水辺公園の概要」
- ・豊岡市（2017）『コウノトリ野生復帰のあしあと』
- ・環境省自然環境局（2016）『生きもの・人・暮らしー生物多様性の主流化で元気になる地域』
- ・豊岡市役所コウノトリ共生部コウノトリ共生課（2015）「ラムサール条約湿地 円山川下流域・周辺水田見どころ MAP」
- ・コウノトリ生息地保全協議会「コウノトリが選んだ村 田結のイラストガイドマップ」
- ・『兵庫県・豊岡市 移住ガイドブック』

5.12 カバンストリート(施設視察)

豊岡かばんの発信拠点であるアルチザン・アベニューなど、カバンストリートを視察した。



カバンストリートにあるカバンの自動販売機



カバンのラッピングバス

収集資料

- ・豊岡観光協会「豊岡まちあるきガイド vol.2」